2003.6.24

The Japan Academy of Midwifery Newsletter No.41

日本助産学会ニュースレター

発行所　日本助産学会
〒102-0071
東京都千代田区富士見１－８－21
東京都助産婦会館内
電話・FAX　03－3221－0417
e-mail: jam1987@ninus.ocn.ne.jp
代表者　堀内成子

巻頭言

助産師教育今昔

西南女学院大学保健福祉学部看護学科
浅生慶子

私がはじめて助産師教育にかかわったのは昭和50年であった。当時の厚生省が助産師不足の到来を予測してかどうかははっきり記憶にないが、厚生省直轄の助産師養成機関を国立病院付属においた。国立大蔵病院をスタートに国立京都病院、そして当時私が勤務していた国立小倉病院に定員35名で開校した。続いて国立仙台病院、国立大阪病院、国立名古屋病院に設置され、定員は30～35名で国立大学、短期大学10校分の助産師学生を６校で教育していたことになる。専任教員２名（うち１名は教育主事）で、今考えるとこれでよく教育できたものだと思うし、何よりも学生たちに申し訳なかったと思う。どの学校の教員も並み大抵の苦労ではなかった。

最近、国の財政事情かそれとも国が助産師教育を担う必要がないと考えられたのか、閉校になった学校もあり実質定員減になった。国立のみならず企業のもつ学校、病院付属の学校も次々と閉校になっている。一方、国立医療短期大学専攻科も保健学科に吸収され、従来20名を教育していたものが保健学科では選択として置かれ、わずか数名から最大20名しか教育できないのが現状である。

助産師コースを置かない大学も半数くらいある。保健師は、年間9000人以上の卒業生がでることになるが、助産師は1300人余しか卒業しない。助産師の養成は本当にこれでいいのだろうか。私の住んでいる北九州は、人口100万を越す都市であるが助産師養成校は現在１校もない。地元産婦人科医会は深刻な助産師不足に頭を抱えている。最近某産婦人科医院の院長は、資金の提供をするので大学の助産師課程を置いて欲しい。必要なら関係団体に全員で要望書を出すことも考えるといってこられた。昨年看護師に内診をさせた産婦人科医院があり厚生労働省から助産師がいないところはすべて産婦人科医がするようにとの通達があった。そのことが助産師不足に一層拍車をかけているようだ。しかし、今の養成教では当然地域差もあろうが、開業医に働く助産師を求めるのは大変困難である。

現在専門職大学院で助産師教育をしようという動きがあるが、私たち助産師が自分たちのこととしてもう少し真剣に考えてもいいのではないかと思う。

現在、学部や専門学校で助産婦教育は行われているのに二つのコースをつくるのかと反対の声もあるが質、数ともに保証されているでしょうか。看護基礎教育では実践能力を高めることが期待されているが助産師に実践能力は期待されないのであろうか？　助産師教育に携わっている人はだれもこのままでいいとは思っていないはずであろう。

実践家を育てるために法科大学院は来年度70校を越す申請がなされるときく。法科大学院と助産師教育は異なるかもしれないが社会の期待にこたえるという意味では同じではないだろうか。法科大学院も助産師の専門職大学院も（できるとして）問題点として次のことが考えられる。1）定員の問題　2）学費の問題　3）一つの制度に二つのルートがある。等々難関が予想されるが、将来の母子保健を担うにふさわしい実践家を育てること今助産師教育に携わる教育者の大きな課題ではないだろうか。

日本助産学会学術集会会場での アンケート調査等の実施について

日本助産学会　理事長　堀　内　成　子

沖縄での第17回日本助産学会学術集会の会場において、学会員によるアンケートの協力依頼があり、実施されました。この件につきましては、事前に理事会において、研究者から研究計画ならびにアンケート用紙の提出があり検討された結果、はじめての試みとして承認しました。さらに、第17回の日本助産学会企画委員会においても、事前に検討され承認を得たものでした。

しかし、この試みははじめてのことであったため、学術集会の参加者から戸惑いや、さまざまなご意見をいただきました。このような試みがあることを、参加者に十分説明し知らせていくべきであったと思います。

その後、理事会で会員の研究推進に活かすべく再度検討し、今後は下記のような条件の元で実施したいと思いますので、ご承知おきくださいますようお願い申し上げます。

日本助産学会学術集会においてアンケート調査等を行う場合の申し合わせ

1．研究代表者は、研究計画書を事前に理事会ならびに、当該学術集会企画委員会に提出し、承認を得ること。(尚、研究計画書には、実施予定の研究説明文および質問紙等を含むこと)
2．研究代表者ならびに研究分担者はすべて、日本助産学会の会員であること。
3．アンケート調査の協力依頼は、すべて研究代表者ならびに分担者自身が行うこと。(ここでの協力依頼とは、配布・説明・回収までのすべてのプロセスを指す)
4．アンケート調査の協力依頼に関するすべての問い合わせや、事務処理は研究代表者自身が行うこと。
5．研究の倫理原則に基づいて、実施すること。
6．研究成果は原則として、日本助産学会学術集会あるいは学会誌において発表することが望ましい。

助産師の国際保健医療活動

―小里道子さんのミャンマーでの活躍―

アジア医師連絡協議会　母子保健専門家　小　黒　道　子
（日本助産学会学会員　2003年３月茨城県立医療大学保健医療学部研究科終了後、AMDA から短期派遣でミャンマーに赴任中）

今年の４月22日より、特定非営利活動法人 AMDA と JICA によるパートナーシップ事業の母子保健専門家としてミャンマー連邦に派遣され、はや１ヶ月半が過ぎようとしています。

ミャンマーには助産師が存在しますが、妊娠・出産にかかわる職種は複数存在します。Lady Health Visitor (LHV)、Midwife (MW)、Auxiliary Midwife (AMW)、Trained Traditional Birth Attendant (TTBA)、TBA と、プロフェッショナルとボランティアを合わせて５つに分類されており、なんとも複雑です。また助産師の活動は女性や周産期領域に限定されておりません。日本の戦後に活躍した地域の駐在保健婦さんのような存在で、電気も水道も無い村に住みながら近隣数カ所の村民全体に渡る保健領域全般の向上を担っています。つまり、最も医療から縁遠くケアを必要とする人のそばで生活しながら、本当のプライマリーヘルスケアを提供しているのです。泥道を自転車や牛車で移動しながら村人に「セヤマ」(「女性の先生」という意味) と親しみを込めて呼ばれる様は、同じ助産師として嬉しくなる一方、日本の助産師と同じ助産師と呼ぶには失礼にあたるのでは、と思うほど幅広い活動を展開しています。

赴任後約数週間かけてミャンマーにおける妊娠・出産の現状を把握するため、10ヶ所程度の村を訪れ各村のセヤマ達にインタビューを行いました。彼女達は村の中で一人で考え一人で判断し実行して行かなければなりません。そのため、当然会陰切開や縫合の技術を持っています。するとおよそ半数くらいの割合で自宅出産でも剃毛を施し、会陰切開を行っているようでした。逆に都市の富裕層は、ミャンマーでは子供の生れる曜日が重要なので帝王切開を好む傾向もあります。技術を知っているとその良し悪しを医学的な根拠を考慮せずに利用してしまう、そしてこれは決してミャンマーだけのことではなく程度は違えども日本でも同じことが行われていると感じました。

今後妊娠・出産にかかわる職種に対してワークショップやトレーニングを企画する予定ですが、「できる限り根拠に基づいたリスク判別と産む人が最大限尊重され不必要な医療介入のない出産」の重要性を、ミャンマーの助産師や補助助産師の皆と話し合い、経験を共有していけたら、と思っています。

助産所研修記　その1

―「実践的知識＝技」の修得に近づくために―

聖路加看護大学大学院修士課程　母性看護・助産学専攻
今　村　朋　子

将来、開業助産婦を目指す私が、助産所の研修に入って約1ヶ月が経ちます。日常生活と助産実践とが一体となったような形で、一日を助産所の中で過ごし、半ば住み込み修行のような毎日が過ぎてゆきます。私はこれまで病院で勤務してきましたが、その時と今では、修得しようとしている知識の質が違う事を感じています。今回は、助産所で自分が何を学ぼうとしているのか、研修を通じて感じた事をお伝えしたいと思います。

病院の中での私は、矛盾に満ちた出産への医療介入に疑問を持ち、ガイドラインなどから科学的知識を学び、それをケアに取り入れる事を目指してきました。そして、どの助産婦も同じケアが提供できるように、それを画一化した手順という「技術」に置き換えて、実践する事を重視してきました。EBMが重視されている現在、こうした取り組みが重要である事は言うまでもありませんが、私自身、科学的に明らかにされた「理論的知識＝技術」ばかりを探求する姿勢が強かったのだろうと思います。

しかし助産所の実践では、EBMの知識との間に矛盾が少ない事に気づかされました。そもそも出産は生理的な現象であるわけですから、自然に起こっている事が最も強力な根拠であり、それを尊重した助産所の実践がEBMと矛盾しないのは当然の事かもしれません。助産所では自然現象の深い理解や、日々の経験からなる実践的知識が豊富に存在し、それが大切に伝承されています。私がここで学ぶべきものは、理論的知識が形作られる基にある「実践的知識＝技」であり、それを身体で感じ、可能な限り言語化する努力をしようと考えながら、日々の研修に取り組んでいます。しかし「実践的知識＝技」は言語化するのが難しく、その言葉にならないところに本質が秘められている事も痛感しています。本物の技の修得には、その世界に身を置き、その状況の中で体感し、自分なりに解釈の努力をする以外にそれを身につける方法はないと言われています。現在、私は助産所という世界の中に身を置き、妊産婦さんの直接ケアという表の部分だけでなく、それを支える裏の仕事や、師匠である先輩助産婦の生活から、丸ごと学べる事の意味の深さを実感している今日この頃です。Lesley Pageがいうような、科学と感性の両方を実践できる助産婦を目指し、これからも修行を続けていきたいと思います。

第17回日本助産学会総会報告

庶務担当理事　多　賀　佳　子

第17回日本助産学会総会は2003年３月22日（土）、沖縄コンベンションセンターにおいて、103名の会員が出席し開催されました。堀内理事長の挨拶で開会され、加藤第17回学術集会会長の議長のもとプログラムにそって議事は進行されました。その概要を報告します。

＊ 総会ならびに評議員会の詳細は日本助産学会誌第17巻第１号に報告されます ＊

【報告事項】

１．理事会報告（堀内理事長）

６回の理事会（うち１回は書面理事会）について報告された。

２．評議員会報告（堀内理事長）

昨日、評議員会が出席23名、欠席14名（委任状12通）で開催され、総会提案事項について審議されたことが報告された。評議員会において、学会ホームページの管理体制の変更について質問があり、web管理を現在のサーバー管理から事務局管理に変更すること、また、助産学会設立の目的については当初と変更されていないことが確認されたこと、会費自動引き落としの実施状況（会員1,200名中約800名が自動引き落とし）と今後も自動引き落としを推進することが確認されたことが追加説明された。また、産科病棟の混合病棟化の問題を学会としても討議していく必要があるのではないかという問題提起があり、今後理事会で検討することになったことが報告された。

３．平成14年度事業報告（平澤副理事長）

１）庶務：会員数（2003年１月末現在）

普通会員　1,190名、特別会員　22名、学会誌購読機関　53機関

「健やか親子21」推進協議会への対応、「助産師団体連絡会」への出席、学会ホームページの管理更新、会員管理、関係諸団体への対応等。

２）渉外：入会リーフレットの改定作業

会則：規定・内規・申し合わせ事項の整備、会則・諸規定の整備、事務運営規定の検討

３）広報委員会：ニュースレターの発行、セーフマザーフッド募金・国際助産師の日ポスター作成への協力

４）編集委員会：学会誌の編集および発行、査読手順の見直しと査読判定基準の検討、投稿規程の一部変更、学会誌のCINAHL登録完了

５）国際委員会：ICM本部との諸連絡と対応、国際評議員会出席、第７回ICMアジア太平洋会議協力、第６回世界周産期学会助産分科会への後援・協力、韓国研修生コーディネート予定

６）国際援助システム委員会：委員会構築、海外からの研修生公募活動、海外との交流活動

７）学術会議委員会：近藤担当理事から訂正・追加を含め以下のように報告された。

① 第19期日本学術会議・学術研究団体第７部に登録申請した。登録研究連絡会は、第１位地域医学、第２位泌尿・生殖医学、第３位出生・発達障害とした。

そして１月28日付で地域医学登録が承認された。登録研究連絡委員（２名）として堀内理事長・加藤理事、推薦人（１名）に丸山理事、準推薦人（１名）に平澤副理事長を登録

した。

会場から登録連絡会の登録申請の第１位を今期変更した理由の説明が求められ、第18期までは泌尿・生殖医学で登録申請していたが、研究連絡委員になることが出来ず、第７部の登録団体ではあるが委員ではないので発言できなかった。地域医学は第18期に第２位で登録申請した。地域医学には２名の委員枠があり、今回看護職に１名分を当ててもよいということになり、今期、地域医学を第１位として登録したという経緯が近藤理事から追加説明された。

8）学術振興委員会：ワークショップの開催、平成14年度研究助成の公募と選考、平成15年度研究助成の公募、研究助成手引きの検討

9）業務・教育検討委員会：平成13年度報告「施設が妊産婦に示すケア（サービス）内容」を「ペリネイタルケア」誌に４回に分けて掲載した。「助産師業務における情報開示」を検討課題とし、来年度も継続検討

10）第17回学術集会準備報告：事前登録435名、一般演題82題。教育講演のヘンリー博士が急遽不都合となり、日本赤十字九州国際看護大学シュナイダー博士による「専門職における看護のリーダーシップ」に変更となった。

以上、１．２．３の報告事項は上記１件の質疑を経て承認された。

4．一般会計収支決算報告（岸田理事）

収　入：18,925,500円（会費、繰越金他）

支　出：12,328,227円（会議費、事業費、事務費他）

繰越金：　6,597,273円

5．特別会計収支決算報告（岸田理事）

学術集会基金：収入　6,112,282円　　支出　2,000,140円

学術奨励基金：収入　15,731,778円　　支出　　700,000円

ICM 評議会出席費用積立金：収入　905,064円　　支出　307,505円

国際援助基金：収入　5,287,087円　　支出　0円

セーフマザーフッド基金：収入　196,000円　　支出　0円

スポンサー・ア・ミッドワイフ基金：収入　504,700円　　支出　502,700円

6．監査報告（浅生監事）

監査は２月14日、３月２日、３月21日の３回実施、最終監査日は３月21日であったことが追加説明され、監査を執行した結果、適当であったと報告された。

以上、４．５の決算報告、６の監査報告は報告のとおり承認された。

【審議事項】

7．平成15年度事業計画案審議（堀内理事長）

1）助産実践・教育の強化

2）助産学に関する研究の振興

3）学会誌・ニュースレターの発行

4）組織強化

5）日本学術会議関係活動

6）国際助産師連盟および関連団体との交流

7）国際助産師の日に関する事業の実施

8）国際援助システムの構築と実施

9）第18回学術集会開催

10）その他、理事会が必要と認める事業

以上、平成15年度事業計画案は賛成多数で原案通り承認された。

8．平成15年度一般会計予算案審議（岸田理事）
収入：18,848,273円（会費、繰越金他）
支出：14,352,000円（会議費、事業費、事務費他）
繰越：4,496,273円

9．平成15年度特別会計予算案審議（岸田理事）

学術集会基金
収入：6,112,142円
支出：2,000,000円
残高：4,112,142円

学術奨励基金
収入：15,031,778円
支出：1,600,000円
残高：13,431,778円

ICM 評議会出席積立金
収入：797,559円
支出：260,000円
残高：537,559円

国際援助基金
収入：5,287,087円
支出：4,000,000円
残高：1,287,087円

セーフマザーフッド基金
収入：196,000円
残高：196,000円

スポンサー・ア・ミッドワイフ基金
収入：2,000円
残高：2,000円

以上、平成15年度一般会計予算案ならびに特別会計予算案は賛成多数で原案通り承認された。

10. 次々期（第19回）学術集会会長の承認

堀内理事長から、昨日の評議員会で次々期（第19回）日本助産学会学術集会会長に宮中文子氏（京都府立医科大学医学部看護学科）が選出された旨の報告があり、賛成多数で承認された。

次期（第18回）学術集会会長松岡恵氏（東京医科歯科大学）から挨拶があり、平成16年３月６日（土）・７日（日）、東京大学安田講堂（３月６日）、学術総合センター（一ツ橋）ならびに学士会館本館（３月７日）で開催されることが紹介された。

平澤副理事長の閉会の挨拶をもって第17回総会は閉会した。

以上

第17回日本助産学会評議員会報告

2003年３月22日（土）、沖縄コンベンションセンター会議室において、定足数37名中出席23名、委任状12名（欠席14名）により第17回評議員会が開催され、総会提出事項の審議と第19回学術集会会長の選出が行われました。

委員会報告

平成15年度編集委員会からお知らせ

年２回の学会誌発行時期が今年度は６月と12月になりました。論文投稿は年間随時受け付けています。査読判定から掲載に要する期間は、これまでの経緯からみると早いもの（論文として完成度が高い）では８ヶ月前後、遅いものでは２年ほどです。まれに基本的な論文指導を継続しないと完成困難で査読の域を超える内容もあります。そのような場合は、一旦、不採用として著者に返却し、検討を重ねた上で再度の投稿をお願いしています。また投稿論文の構造化抄録について、十分な理解と徹底がなされていないように見受ける論文もありますので、抄録記載の要点を示した記事を第17巻１号で編集委員会より掲載する予定です。

（島田　啓子　記）

ICM関連のお知らせ

１．ICM 本部からの連絡事項

１）「助産師職能団体の強化に関する ICM 加盟団体の能力アセスメントツール」への回答依頼があり、回答しています。

２）オランダ、ハーグの ICM 事務局長をされていたペトラ　テン　ホップーベンダーさんが辞任されることになり、今後理事会で候補者選考が行われる予定です。

２．第７回 ICM アジア太平洋地域会議（香港）について

SARS 情報で開催をご心配されている方も多いと思いますが、現在のところ中止等の連絡は入っていませんので、ICM アジア太平洋会議ツアーは計画しております。〆切は10月10日です。ツアーに関するお問い合わせは下記の連絡先にお願いします。

「香港の状況を心配して下さりありがとうございます。SARS はコントロール下にあり予定通り開催しますので是非ご参加の呼びかけをお願いいたします。

尚、研究発表の抄録は７月末まで延長しましたので、詳細は Web サイトをご覧下さい。それでは、11月にみなさまにお会いできることを楽しみにしております。

香港助産師会会長　Sylvia FUNG

Web:http://www.midwives.org.hk/mess_edu_c1.html」

ケイ・コンベンション（株）
〒160-0022　東京都新宿区新宿1-31-3-409　担当：荒木憲治
電話：03-5367-2382　fax：03-5367-2187　Email：araki-ken@k-con.co.jp

（国際委員会　記）

国際援助システム委員会からのお知らせとお願い

１　2003年３月　沖縄での助産学会ワークショップではブラジルからの産科看護婦を迎えて日本の助産学会会員との交流ができました。ワークショップについては、助産学会誌にて報告記事を掲載する予定です。

２　海外からの研修生招聘事業について報告

公募した結果、ネパールとバングラデシュからの応募がありました。５月の理事会にて、ネパールからの研修を受け入れることとなりました。AMDA が母子病院をつくり母子保健活動

をしています。その病院の看護職と医療職の研修受け入れをすることとなりました。女性とこどもにやさしい病院にしたいとのことで、日本の自然で安全な出産を学ぶコースを期待されています。助産実践を担う看護師２名と管理部門の病院長１名が11月からの研修に参加されることとなりました。

3　アンケートのお願い

国際援助システム委員会では、会員の皆様の国際協力に関するデータベースを作成し、今後の協力事業に役立てたいと考えております。ぜひ皆様のご経験をお知らせいただきますようにお願いいたします。ニュースレターと同時に同封させていただくアンケート用紙にお答えいただき、８月末までに助産学会事務局までFAXいただきすようお願いいたします。

（毛利たえこ　記）

学術振興委員会

①　平成15年度研究助成対象者の決定

平成15年度の委託・奨励研究助成の応募は、委託研究４件、奨励研究６件でした。５月９日の理事会で最終選考をしました。

今年度の委託研究は「健やか親子21」の推進をするために「課題２の妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援」についての課題を募集しました。以下の方々に決定しました。計画に従ってよい研究をして頂きたいと思います。

今回助成の対象にならなかった応募者の皆様の視点も大変興味ある研究計画でした。今後に期待をしたいと思っております。

委託研究助成（助成額50万円）

①研究代表者：村上　明美（日本赤十字看護大学）
　テ　ー　マ：妊産婦支援における産科医師と助産師のコラボレーション
　　―妊娠・出産の安全性と快適さを追求した病院の取り組み―

②研究代表者：長岡由紀子（聖路加看護大学大学院）
　テ　ー　マ：不妊治療を受けている女性の悩みと対処パターンのモデル構築

奨励研究助成（助成額30万円）

①研究代表者：福島　裕子（岩手県立大学看護学部）
　テ　ー　マ：多胎児をもつ母親と家族への看護支援
　　―妊娠期からのピアサポートの試み―

②研究代表者：宮里　邦子（広島大学　医学部）
　　足浴による分娩促進作用：自律神経に対する足浴の作用機序に関する基礎的研究

学術会議報告

５月29日に日本学術会議で第19期日本学術会議会員選出に係る推薦人会議が行われ、地域医学関連研究連絡委員会に出席しました。この研連から２名の会員候補と１名の補欠を選出しましたが、今回看護系学会から会員候補を立てることはできませんでした。しかし、次期からは会員選出方法が変わることになりましたが、看護系学会として話し合いが必要ではないかと考えます。

（丸山知子　記）

平成15年度助産学会ワークショップのお知らせ

平成15年度のワークショップを京都で開催します。本ワークショップは、助産学会開催前年度に学会長に計画をお願いしております。多くの皆様が助産学会に関心を寄せて頂き、参加をすることを啓蒙すると同時に、開催県の皆様がより研究活動がスムースに行くよう支援するものであります。本ワークショップは京都近郊のみならず、全国どこからでも参加をして頂いて結構です。多くの皆様の参加をお待ちしております。

テ　ー　マ：ケアの質的向上のための助産学研究の進め方

開催日時：平成15年11月15日（土）　9時～16時

開催場所：京都府立医科大学医学部看護学科　第1講義室

基調講演：午前9時30分～11時
ケアの質的向上のための助産学研究の進め方（仮題）
聖路加看護大学学部長　教授　堀内　成子 先生

ワークショップ（午後）
13時～16時
1）助産ケア実践の検証に関する研究（妊娠、分娩期）
2）助産ケア実践の検証に関する研究（産褥、新生児、ハイリスク新生児）
3）育児における人間環境に関する研究
4）青年期の健康教育に関する研究
5）助産学教育に関する研究

参　加　費：3000円（資料第含む）会員、非会員

連　絡　先：京都府立医科大学医学部看護学科 看護学科
助産学・母子看護学分野　　宮中　文子

〒602-0857　京都市上京区清和院口寺町東入中御霊町410
TEL・FAX：(075)-212-5440
E-mail:miyanaka@cmt.kpu-m.ac.jp

（加藤尚美　記）

Joyful Midwifery With Women 2004 in tokyo

Japan Academy of Midwifery

第18回日本助産学会学術集会のご案内

第18回の日本助産学会学術集会は、メインテーマ「喜びとともにうまれる、その先の助産ケア。Joyful Midwifery With Women」をもとに下記のとおり開催いたします。多数のみなさまのご参加をお待ちしております。

第18回日本助産学会学術集会会長　松岡　　恵

■1．期　日　2004年3月6日（土）～7日（日）

■2．会　場　東京大学安田講堂（6日）、学術総合センター・学士会館（本館）（7日）

■3．参加費について

1）学術集会参加費
前納①会員8,000円　②非会員 9,000円　③学生（但し大学院生は除く）および一般5,000円
当日①会員9,000円　②非会員10,000円　③学生（但し大学院生は除く）および一般5,000円

2）懇親会：
日　時：平成16年3月6日（土）　18：30～20：30（受付18：15～）
会　場：学士会館分館　　会　費：5,000円

3）参加費振込先
郵便振替　口座番号００１００－７－５７６５２３
加入者名　第18回日本助産学会学術集会

■4．演題の申し込み・抄録投稿

発表を希望される方は必要書類を下記事務局にご請求の上、2003年9月12日（金）（当日消印有効）までに、演題申込用紙と抄録の提出を一括して事務局にお申し込みください。

・投稿者の資格：
共同研究者を含めすべて会員に限ります。演題採用決定後、学会当日までに入会金・年会費が未納の場合は、発表の権利が抹消されます。

・必要書類
1）演題申し込み関連書類（はがき1）と2）には50円切手をお貼り下さい）
2）演題抄録（オリジナル1部、コピー1部、所属名および発表者名を伏せた演題名のみの抄録コピー3部、計5部）

・一般演題
発表内容の形式は「研究」と「実践報告」、発表方法の形式に「口演」と「ポスター」があります。申し込みの際にいずれかをお選びください。

■5．連絡先

〒113-8519　東京都文京区湯島1-5-45
東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科　リプロダクティブヘルス看護学分野
第18回日本助産学会学術集会事務局（清水）
TEL/FAX：03-5803-5347　　URL：http://jam18.umin.ne.jp

■6．プログラム概要

●第1日　3月6日（土）

会長講演　13：00～13：40
「喜びとともにうまれる、その先の助産ケア。」
・演者：松岡　恵（東京医科歯科大学）
・座長：宮中　文子（京都府立医科大学）

招聘講演　13：40～15：10
「Joyful Midwifery with women in New Zealand」
・演者：Sandy Grey（ニュージーランド助産師協会会長）
・座長：堀内　成子（聖路加看護大学　日本助産学会理事長）

総　会　15：10～16：10

シンポジウム　16：10～18：00
「喜びにあふれた出産・育児のために、いま私たちができること（仮）」
・演者：赤山美智代（助産師ネットワークJIMON代表）
奥山千鶴子（NPO法人びーのびーの理事長）
栗原　美幸（子育てサイト「子育てワハハ」主宰）
・座長：平澤美恵子（日本赤十字看護大学）
片桐麻州美（神奈川県立保健福祉大学）

懇親会　18：30～20：30　学士会館（分館）

●第2日　3月7日（日）　一般演題発表及びワークショップ　9：30～11：30、13：00～17：00

「その先の助産ケア」を探る6つのワークショップ：

1）職域を越えた助産師の連携が母子の安全を保障する
・演者：村上　睦子（日本助産師会）
山本　時子（山本助産院）
福井トシ子（杏林大学医学部付属病院）
・座長：神谷　整子（みづき助産院）
藤木佳代子（東京医科歯科大学医学部属病院）

2）日本の助産師が国際協力で求められているものは何か？
・演者：小山内桀代（国立国際医療センター）
立山　恭子（日本キリスト教海外医療協力会）
・座長：毛利多恵子（日本助産学会国際援助システム委員会）
藤原　美幸（日本助産学会国際援助システム委員会）

3）助産の喜びを見いだせる助産師とは
・演者：宍戸　あき（日本赤十字社医療センター）
新崎　早苗（愛育病院）
加藤　麻紀（湘南鎌倉総合病院）
・座長：川島　広江（川島助産院）
塩野　悦子（宮城大学）

4）改めてエビデンスに基づいたアロマセラピーを学ぼう
・演者：林　真一郎（グリーンフラスコ）
黒川寿美江（聖路加国際病院）
・座長：井村　真澄（聖路加国際病院）

5）母子相互作用の視点を毎日のケアに取り入れよう
・演者：広瀬たい子（東京医科歯科大学）
・座長：佐々木和子（国立看護大学校）

6）相手をもっと理解するために自分を知ることから始めよう
・演者：宮本　真巳（東京医科歯科大学）
・座長：村上　明美（日本赤十字看護大学）

※企画進行中につき、すべて仮タイトル

日韓学術交流開催のお知らせ

韓国女性保健学会＆日本助産学会共同主催

女性の健康問題は、その生殖機能の特異性から生じる問題点をはじめ、社会におけるジェンダーのもつ問題点や、家族のもつ健康問題など、複雑で多岐にわたります。しかし、それ故、女性にとって住みやすい社会とは、また、他のすべての弱者にとっても住みやすい社会であり、社会を女性保健の視点から見直すことは有意義なことです。

この度、日本助産学会では、韓国女性保健学会から、25名の来訪者を迎え、ウィメンズ・ヘルスに関する医療保健活動の現状や、将来への展望を語り合う機会を設けました。殊に９日の18：00から、聖路加看護大学にて開催される学術フォーラムには、日韓両国から４名のスピーカーをお迎えし、更に、ポスターセッションも予定しております。この７月９日のフォーラムは広く公開しますので、是非、多くの方のご参加をお待ちしております。

〈韓国女性保健学会員　来日スケジュール予定〉

【１日目】
2003年７月８日（火）

矢島助産院見学　（担当：国際担当班　加納理事）

【２日目】
2003年７月９日（水）

午前：10：00～12：00
聖路加看護大学にて地域母子保健に関する意見交換
講師：東京都中央区保健所　健康推進課　課　長　成田　友代
東京都中央区保健所　健康推進課　保健師　（交渉中）
午後：14：00～17：00
聖路加看護大学および聖路加国際病院見学
夕方：18：00～20：00
聖路加看護大学にて、日韓学術フォーラム（詳細は後述）
（担当：堀内理事長）

【３日目】
2003年７月10日（木）

午前：10：00～12：00
横浜女性フォーラム見学（担当：国際担当班　加納理事）

ウイメンズ・ヘルスの現状と展望

～日韓学術フォーラム～

韓国女性保健学会＆日本助産学会共催

日　時：7月9日（水）18：00～20：00
会　場：聖路加看護大学　301教室
参加費：資料代金500円
※日本語・韓国語の逐次通訳が入ります。

〈プログラム〉

◆開会挨拶　　日本助産学会　理事長　堀内成子
韓国女性保健学会　Park, Young Sook

◆シンポジウム　　司会　石川紀子（愛育病院）

・韓国におけるウイメンズヘルスの現状と課題　（韓国）
Soonchunhyang University　Kim, Jeungim

・日本におけるウィメンズヘルスの現状と展望　（日本）
宮崎医科大学　大石時子

・ウィメンズヘルスにおける看護研究の傾向　（韓国）
Seoul National University　Park, Young Sook

・自然なお産・育児支援から女性への暴力防止を目指して（日本）
まつしま産科小児科病院　長谷留美子

◆閉会挨拶　　日本助産学会　国際委員長　加納尚美

※会場にて、韓国女性学会員によるポスターセッションを予定

問い合わせ先：聖路加看護大学
〒104-0044　東京都中央区明石町10－1
担当者：小陽美紀（聖路加看護大学母性・助産学研究室　助手）
Tel／Fax：03-5550-2372
E-mail：miki-koyoh@slcn.ac.jp

第6回世界周産期学会開催のお知らせ

第6回世界周産期学会を下記の要領で開催いたします。多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。詳細については、本会のホームページ（http://www2.convention.co.jp/wcpm6/）をご参照下さいますようお願い申し上げます。

第6回世界周産期学会
会長　村　田　雄　二

1．会　　期　2003年9月13日（土）～16日（火）

2．会　　場　大阪国際会議場（大阪市）
〒530-0005　大阪市北区中之島5-3-51
TEL：06-4803-5555（代）

3．主　　題　変曲と進歩
－母と子たちのために我々は何をしてきたか、将来何ができるか

4．プログラム
特別講演、招待講演、シンポジウム、ワークショップ、一般演題（ポスター）などを予定しています（ホームページにて順次公開）。

5．助産学会分科会について　　9月14（日）、15日（月）
「女性中心の助産ケア」というメインテーマで下記のようなプログラムが予定されています。

＊各講演・シンポジウムは英語で行われますが、助産分科会に限って日本語による同時通訳がつきます。また日本語からの質問には英語通訳の補助があります。

全体講演
「母子保健における助産師・看護師・医師の協働実践による学際的貢献」
ジョイス・トンプソン（国際助産師連盟理事長）
「女性中心のケアシステムを創り出す」
堀内　成子　（日本助産学会理事長）

〈第1日目〉
基調講演
「母親・子ども・家族・支援者にとっての周産期ケアにおける倫理的課題」
ジョイス・トンプソン（国際助産師連盟理事長）

根拠に基づく正常出産における助産ケア		
	シモーヌ・ブイランジック	(疫学者／オランダ)
	林　　謙治	(医師／日本)
正常出産にむけた臨床実践	神谷　整子	(助産師／日本)
	サリイ・トレイシイ	(助産師／オーストラリア)
	ビバリー・ビーチ	(女性グループ代表／英国)
助産師と医師・消費者との協働	高橋　律子	(助産師／日本)
	ヘレン・マクドナルド	(助産師／カナダ)
	中根　直子	(助産師／日本)
	竹内　正人	(医師／日本)
	リサ・ケイン・ロー	(助産師／アメリカ)

〈第２日目〉

基調講演　「女性学からみた女性中心のケア」

バーバラ・カッツ・ロースマン　(社会学者／ドイツ)

セクシュアリティと助産	角田由紀子	(弁護士／日本)
	バージニア・リンチ	(看護師／アメリカ)
	バサンティ・マジャーター	(助産師／南アフリカ)
	大石　時子	(助産師／日本)
助産と教育	加納　尚美	(助産師／日本)
	アン・チャウ	(助産師／香港)
	レズリー・ページ	(助産師／英国)
	パトリシア・バークハット	(助産師／アメリカ)

6．事前参加登録について

事前参加登録締切日　　2003年７月31日(木)

7．参加費

	事前登録	当日受付
会員	¥50,000	¥60,000
非会員	¥55,000	¥65,000
助産師・コメディカル	¥25,000	¥30,000
同伴者	¥10,000	¥10,000

8．総会についてのお問い合わせ・資料請求先

第６回世界周産期学会事務局
日本コンベンションサービス株式会社内
〒541-0042　大阪市中央区今橋4-4-7　京阪神不動産淀屋橋ビル４Ｆ
Tel：06-6221-5933　　Fax：06-6221-5938
※コンベンションサービス
(E-mail：wcpm6@convention.co.jp) にお願いします。